

玉縄の福祉活動 たずさわって20余年



「玉縄地区社協だより」

編集長 盛田 幸枝さん

鎌倉生涯学習センターで11月17日開かれた「第8回地域福祉推進感謝の集い」(主催・鎌倉市社会福祉協議会)には、地域の福祉活動に貢献された市内在住28人の方々とともに、盛田さんの晴れやかな受賞姿がありました。

玉縄・関谷の地で農業にたずさわりながら、青少年指導員など20有余年にわたり地域の福祉ボランティア活動に従事してきたことが評価されてのことです。とりわけ、地域福祉の情報を網羅した「玉縄地区社協だより」のまとめ役、編集長として15年の間、地域の人達に福祉への利便を提供し、よき羅針盤としての役割を果たしてきたことの功労でもありました。



「もともと編集などの才覚などありませんでしたし、だいたい福祉が何たるものかもよく理解できていませんでした。青少年指導員を仰せつかった時は、会議に出て、時間のあるとき手伝ってもらえればそれで十分」。町内会長から説得されて、軽い気持ちで引き受けたものの実際はそれではすみません。

「何も知らない者が、難しいことをやるなど、畑違いもいいところでした」との、忸怩たる思いは今でお持ちだそうです。

年 4 回発行を定着

15 年以前の玉縄地区社協だよりは、時折、思い出したように発刊される不定期な刊行物でした。当時の小永井潔玉縄社協会長らが「福祉は行政に頼るばかりでなく、まず地域で住民同士が助け合い、支えあう。そのためにも福祉に関する情報をしっかり伝えていく仕組みが必要」と、玉縄地区社協だよりの定期発行を推進、そのためにもスタッフ体制を整える必要に迫られていました。



忙しい農作業のかたわら青少年指導員の役割を果たしていた盛田さんに白羽の矢が立ちました。「福祉のいろはも判らない自分にはとても無理、と申し上げてきたのですが、みなさんからは協力するから是非にも…」と、民生・児童委員の方々ら応援団の強い後押しもあって編集長に着くと同時に、年 4 回の定期発行に踏み切りました。

「恥をかくようなことばかりでしたが、現在は民生委員や玉縄女性の会のみなさんを中心に 7 人の編集委員に協力頂き、この 10 月で 61 号の発行にこぎつけています。ただ支えられて、いまだに名前ばかりの編集長ですから」と遠慮がちですが、盛田さんを軸にして定期刊行化を実現し、毎回、発行時には玉縄地域 9,000 所帯に無料配布され、



掲載された情報は地域の福祉推進に役立てられています。

それはまた、盛田さんにとって自身の財産になったと言うことです。「農業のことだけしかわからなかった田舎者が、福祉だとか人助けだとかに協力できる」。機会に恵まれなければ、出来得なかったことといえます。今は、生きる糧、生き甲斐へとつながるものになったということです。

年4回の刊行といっても「玉縄社協だより」の編集会議は月に数回開かれます。

企画物の検討から筆者への依頼、編集レイアウトの打ち合わせ、印刷会社からの校了紙のチェックなど忙しく追われる日も。それでも、インクの香りたつ社協だよりが刷りし、読者の手元に届くのはこれまた、編集長冥利に尽きるということかもしれません。



今回、地域福祉推進感謝の集いで特別表彰を受け、梅澤淑弼鎌倉市社会福祉協議会会長から表彰状が手渡されました。民生委員を20年経験された方など28

人の受賞者がありましたが、社協だよりの編集作業はどちらかといえばくろ子役。表面に出る役回りではありませんが、「青少年指導員から数えれば20年以上ボランティアの先頭に立って働き、また、社協だよりを定期刊行物としてきっちり軌道に乗せてもらった。大変有難いことでした」と、小川サヨ子玉縄地区社協会長は推挙の理由を強調しています。



盛田さんのご本業はブランド品鎌倉野菜の製造元。品質は折り紙つきで玉縄地区でのイベントなどでは盛田さんの野菜売り場にはいつも長い行列ができます。ご主人とともに畑で育てた野菜が消費者の手に渡り、盛田さんの野菜は新鮮で美味しいと言われるのが一番の喜び。

鎌倉市がJA農協とタイアップし

て年に一度「秋の収穫まつり」を開いていますが、盛田さんの畑から出品される大根やニンジンなどの野菜は、優れた出来栄を評価する品評会で、毎回優秀賞などの栄誉に輝いていることから実証されます。

(2016/11月記)

盛田さんの畑でとれた新鮮野菜はいつも評判

